

---

# 喜怒哀楽

Kanori

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

喜怒哀楽

### 【Nコード】

N7334C

### 【作者名】

K a n o r i

### 【あらすじ】

いじめにあっていた桜。変えられない自分。涙は止まることを知らなかった。でも、止め方を教えてくれる人達との出会いで、桜は大きな一歩を歩み出した。

## 止まらない涙

私は、自分が悲劇のヒロインだとも思っていたのかもしれない

私は、小学6年生。課外のミニバスケット部員だけど、長身っただけで入りたくもないのに無理矢理入部させられた。

「桜ー！」

私を読んだのは夏末。色白で顔立ちも良く、男子から何度も告白されたのを見たことがある。

その横には、杏里と心がいた。杏里はスポーツ万能のバスケ部キヤプテン。心も、可愛い顔で人気があった。

愛想がいい3人は、大人達からも好評で、いつも笑顔で褒められている。

でも、3人には裏があった。私をいじめて楽しんでいた。所詮、小学生の遊びでしょ？って思うかもしれないけど、どんどん私の心と身体はボロボロになっていったんだ。

「おはよう…」

「はあ？聞こえないんだけど、何て言った？」

「おはよあ…」

「何キレてんの？ウザいんだけど。」

「キレてないよ？」

「キレてんじゃないん！謝って。」 「えっ？何で…」

「いいから謝れってばー！」 「ごめんなさい…」

「ほら、桜のせいで雰囲気悪くなったじゃん。もういい！今日一日、桜の事無視しよう。」

こんな会話が毎日続く。他の友達とつるめばいいんだろうけど、前に他の友達と遊んでいたらその子の家まで来て、私が乗ってきた自転車のかごにゴミをいれて帰って行ったことがあって、その次の日には…さっきみたいに口攻めにあう。

そついうのに会わないためにも大人しく従つて、こんな人たちでも良いところはあるんだつてプラス思考に考えて、過ごしていた。所詮、人間なんて一人。先生なんて頼れない。私が精神的に弱つて、保健室で涙流していた時も、担任は泣いているところを見て、笑つていた。

ボールをぶつけられるのなんて当たり前。

「自殺の場所決めたー？」

「桜あ、おごつて」

「ねえ、好きな人をこつから大声で叫んだら？」

「早く死ねよー」

「まだ生きてたの？」

「ウザイ」

何度も言われてきた言葉。あいつらは、飽きずに毎日言ってくる。ちよつと可愛いペンとかをもつてくるとすぐ没収。正確には、「貸してー」といいつつもどつてこない。

こんな毎日。やつとのおもいで卒業。卒業すれば何もかも終わつてしまふと思つていた。

今までの事も、思い出になると思つていた。

でも、そんなに世の中甘くない。仲良し4人、そろつて桂中学校へ入学することに。”今”しか考えていなかった私は、中学校生活の楽しい姿を夢みていた。

私は自動的にバスケット部へ入部した。1年は11人。1学年100人位にしては多いほう。

メンバーは、沢村、瞳、香織、明、のり、菜々子、ゆうか、夏未、杏里、心。沢村は、ずっと理由つけて部活をサボり、いつの間にか退部していた。

バスケット命つて感じの杏里と、練習嫌いだけど才能の持ち主夏未がチームを引っ張つていた。

明は、レギュラーになれないのが嫌で、他中へ転校していった。先輩達4人は素人だったから、私たち1年がレギュラーになつ

た。成績は市でベスト4ぐらい。なかなかの強豪チームだ。でも、チーム内はドロドロしていた。もともと気の強い、杏里と夏未とで別れてしまっていた。

なぜ、そんな亀裂がはいったかというところ、杏里が練習中はもちろん、普段からの自己中がすごかったから。

杏里が原因で、みんな退部していつて、杏里、菜々子、ゆうか、私の4人が残った。

みんなから言えば、杏里が嫌いなら辞めちゃえばいいと思うでしょ？でも、それは逃げにつながる。そんなのは絶対に嫌だった。

中学校に入って、周りの環境が変わって私の性格は変わってたのかもしれない。無愛想で、友達なんて興味ないなんて感じ。そんなだから、周りに人がいなくなっていく。休日も一人、学校では友達いるけど、親友と呼べる人がいない。

自分が嫌いな私。自分を変えたい私。自分を変えられない私。もう、どうしたらいいか涙が溢れてくる。

涙は止まることを知らない。

でも、知らないなら教えてあげればいいさ。

独りの私に、あいつは言ってきた。それは、戸川 喜徳<sup>とがわよしのり</sup>。話したことはあったけど、あんまり関わりのない関係。

だけど、昼休みに独りで屋上にいた私は、喜徳の言葉に感動してしまった。

「だいたいさあ、お前は周りに近寄らさないオーラを放ってるだよ。」

はあ？さっきの感動が台無し。

「意味分かんないんだけど。」

「そのまんまだよ。いじめられてたかなんだか知らねえけど、そんな性格だから友達少ねえんじゃない？そんなんじゃない？誰も友達なんかにならねえよ」

ぶちッ何かが切れる音。

「はあ？誰も友達なんかいるなんて言っていないし！！てかあんな何なのさっ何にも知らないくせに知ったような口してさあ。あんなが私の何を知ってるって言うの？何にも知らないじゃん。そもそもあんに、私が友達少ないなんて関係無いでしょ……」

なんか知らないけど、たくさん言ってしまった……

???何故か笑っている喜徳。

「なにわらってるの？」

「いやあ、あんたがこんなに話すなんて予想外だ。お前、いや桜。俺、桜の事気に入っちゃった 付き合おう」

……私は、教室へと走っていった。何なんだろうこの気持ち。まさかあんな展開になるなんて思ってたから、ドキドキが止まらない。私は1組、あいつは3組。授業で一緒になることはない。

「どうしたの？顔真つ赤だよ！熱あるんじゃない？」

「ありがとう。でも大丈夫だから。」

少ない友達の一部、菜々子。杏里の前では話さないけど、普通に接してくれる。

あッそういえば、部活引退しました！なかなかの好成績で県では有名校！なはず。部活に入ってたって思うことは、菜々子とゆうかと仲良くなれたこと。自然と杏里達は私の事をいじめなくなっただけ、目も合わさない。

「何かあったでしょう！」

「何にもないよ」

そんな普通の会話ができる事がすごく幸せ。

「桜ッ」

呼ばれたほうには喜徳が……私は黙ってついていく。

「俺、本気だから。いつも見てた。逃げないで頑張っていると。そういうのすげえなって思っていたんだ。だから、思い付きであんなこと言っただけじゃないから。」

よかったら俺と付き合ってください。」

涙がでてきた。

「本気で私と向き合ってくれる人なんていないと思ってた。すごく喜徳と会えてよかった。もしよかったら私に涙の止めかた教えてください」

「……………」

「馬鹿あ。そうに決まってるじゃん！」

「幸せいっぱいの人。喜徳は私を本気で好きになってくれた初めての人。」

「この幸せが続けばいいな。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7334c/>

---

喜怒哀楽

2010年10月28日06時47分発行